

戦時中の千里第二小学校

十八回生 小木曾 文子

(名田)

国民学校

小学校が国民学校と改称された昭和十六年、私は国民学校一年生になりました。太平洋戦争の開戦の年です。それから六年間、卒業するまで国民学校で通したのは私たちの学年だけです。そして国民学校卒業と同時に六、三、三制の教育改革が行なわれ、受験する筈だった府立の中学校、女学校の門は閉ざされてしまい、私立に進学する人以外は、全員新制中学校に進むことになりました。

私たち十八回生は教育制度改革の都度、その節目に立たされてきた学年です。

六年間国民学校の生徒であった私たちは、まさしく戦時中の軍事教育を受けました。教科書は全て改訂さ

れ、一年生のよみかた(読本)の二ページ目が「サイタサイタ サクラガサイタ」が「アカイアカイ アサヒアサヒ」に変わりました。国語や修身を始め唱歌や習字の手本に至るまで、天皇陛下を崇拜し、戦争に勝つ強い国を印象づける言葉が多く盛り込まれていて、無邪気な子供達に愛国心を徐々に沁み込ませました。自然の美しさを讃えて、伝統文化を尊重し、日本国民としての誇りを持たせました。また道徳教育もしっかり叩き込まれました。私達は与えられるまま受け入れていましたが、時間の経過と共に記憶がだんだん薄れています。今も、私の心に強く残っている当時の学校教育は、軍国主義で非常に厳しかったという点です。

講堂で行なわれた式典や行事の時、私たちは先ず天皇皇后両陛下の御真影を拝し、校長先生が読まれる教育勅語を聞きました。生徒たちは終始頭を下げ神妙に聞いていました。

運動場で行なった朝礼では、先生の号令に従って生徒は全員きびきびと整列し行動しました。二宮金次郎の銅像の傍の奉安殿に最敬礼をし、国旗を見上げて、時には東の方向の宮城に向かって最敬礼をしました。

先生の「きをつけ！」の号令一下、背筋を真つ直ぐに指先までピンと伸ばし直立不動「前へならえ！かしらー右！」などの掛け声にしたがって全員サツサと動き、「休め」の体勢になって、校長先生の訓示が始まります。私たちはじつと辛抱強く聞いていました。ちよつとでも気が散って、よそ見をしようと、直ぐ先生に見つかります。絶えず先生の目は光り、私たちは緊張していました。

運動場で子供達が整列し行進する時、膝を高くあげ手を大きく振って、先生の笛の音に合わせ足並み揃えて進みます。きちつと並んで整然と歩いていました。それから何年も後のことですが、東京オリンピックの開会式で、各国の選手達それぞれが、リラックステして嬉しそうな表情で入場する光景をTVで見、ふと昔の私たちの姿を思い出し、あまりのギャップに驚いたものです。

二年、三年生の受け持ちは串本先生でした。小柄で色白、面長の綺麗な顔立ちの先生でした。が、やつぱりその時代に沿った教育だったのでしょうか？私たちは厳しく躰けられました。同級生と当時の思い出話に

戸惑われたでしょうと、今頃になって気が付いた次第です。

教科書

五年生の新学期、教冊の新しい教科書を頂きました。その中に「国史」の教科書がありました。五年生になって初めて歴史の科目が増えたのです。

目新しくて神秘的な世界を覗くような特別な感覚を持って、そのページを繰った記憶があります。

一方、世の中は戦局ますます厳しくなり昼夜を問わず警報のサイレンに脅かされています。警戒警報が正午を過ぎても解除にならなかつたら学校は休みになり、また在校中に警戒警報が出ると子供たちは急いで帰宅します。

「このような状態が続き、落ち着いて授業を受ける」ともなく、一学期が終わってしまいました。そして「終戦」。

一学期が始まったある日、教室でお習字の準備をして墨を摺っていました。その日はいつもの様にお手本

になると、「怖かったねえ」と一番に串本先生が話題のぼります。ある日の音楽の授業中、音程がどうしても外れてしまつて上手く歌えなかった時、とうとう先生はピアノの前に立つて、けたたましくピアノを叩かれました。その音が講堂中に一段と激しく鳴り響き、私たちはオドオドして、ますます声が出なくなつてしまつた怖かつた情景も今は懐かしい思い出となり話が弾みます。

教室での受け答えも、大きな声ではっきり「はきはき」と答え、命じられたら直ぐ行動していた面などは、その後の成長にプラスになったかもしれませぬ。授業中の話し方が「です」ではなくて、「であります」と、軍隊調の言葉遣いに強制されたこともありました。

終戦後、私たちは家庭科の授業を串本先生に教わる時があり、昔のことを思い出して、すごく緊張して先生を迎えました。ところが、予想外に穏やかに指導していただき、ほつとしながらも、別人の先生に思え、不思議な感覚で先生を見ていました。

これが戦中と戦後の教育の変わりようでしょうか？受身の私たちよりも、先生方のほうが、教育体制の変化を見て字を練習するのではなかつたのです。先生の指示に従つて教科書の中の文を次々と黒く塗りつぶしていきました。

でも「国史」の本は墨で消した記憶がないのです。そのまま学校に返してしまつたような気がします。

上級生の人たちが歴代の天皇の名前を暗誦している姿を見ていました。私も覚えなくてほと、意気込んだこともあつたのに、とうとう天皇の名前はほんの触り程度で終わってしまいました。

六年生で「国のあゆみ」という新しい歴史の本が配られました。分厚かつた国史と比べると、薄っぺらな本になっていて、日本の国の始まりがすっかり変わっていました。あの五年生の国史の教科書はどんな内容だつたのでしょうか？読んでみたいものです。

干し草

終戦の年の夏休みに、「干し草一貫目を持つてくる」という宿題が出ました。この干し草を何に使うの

か説明されたかどうかは覚えていませんが、ともかく先生からの通達はどうしても守らなくてはなりません。その頃この家も庭は畠になって野菜などを作っていました。休閒地利用といわれ小さな空き地も何処もかも耕され、道端まで一畝の長い畠になっていました。小学校の運動場もいちめん広い畠でした。

さて雑草を取ろうと思っても家の近くには生えていません。とは云っても千里山のこと、家の前の坂道を登りきり、はげ山の近くまで行くと、そこには道端にも雑草がぼうぼうと生えていました。友達と持ったこともない鎌を使って、どうにか刈り取った草を家に持ち帰り、これを日に干すと、嵩がしよぼんと小さくなります。一貫目にするには並大抵のことではありませんでした。

先生は次々集まってくる干し草の束を講堂の裏の出入り口に、山のように積み込まれました。

それからどれくらい経ったのでしょうか？ある日給食があり、スープと共に茶色っぽいパンをいただきました。なんと不思議な味で口当たりがザラザラしました。

地味な色の服でした。この制服もおそらく私たちが最後で自然消滅しています。物資が乏しくなり、子供の成長に伴って新しく調達出来なかったのでしょうか。そのうち、この制服に代わって、子供達はもんぺ姿になり綿入れの防空頭巾を持って通学するようになりました。頭巾は折りたたんで座布団になっていました。(頭に被るものをお尻に敷くとは・・と親から小言が出そうですが。)

男の子たちは制服があったのかどうか憶えていませんが、紺色や国防色の上着を着ていたのではないのでしょうか？小さな衿に前開き五つボタンの上着です。当時国民服と呼ばれた国防色の上下を大人の私たちは着ていたようです。役所勤めの父も背広から国民服に代わり、毎朝ゲートルを足に巻くのですが、なかなか思うように巻けなくて、何度もやり直していた姿を思い出しました。

また、運動場で多くの子供達がお揃いのセーターを着て遊んでいた光景が目につきます。紺色の手編みのセーターです。男の子は淡いグレーの線が二本、

す。誰かが小声で「草が入っている」と云っています。よくよく見ると小さく細かく刻んだ草がいっぱい入っていました。ああ、あの時の草かしら？と、一瞬思いながら、私たちは黙々と食べました。あの草は馬や牛の飼料ではなかったのでしょうか？パンの中の草は、私たちが供出した干し草だったのか未だに疑問です。

制服

私が入学した頃には千里第二に国民学校には制服がありました。制服とは云っても全員が揃って着ていたようでもなく、普段の通学で着ていた記憶もありません。でも一年生入学式の記念写真や遠足の写真では大半の子供がその制服を着ています。

どんな制服であったのか、うろ覚えですが、国防色と呼ばれたカーキ色に少しグリーンをかけたような色のセーラー服で衿に青い線が二本入りタイがついていました。いつ頃からこの制服があったのか上級生の方に伺わないと判りませんが、儉約が国民の合言葉であり質実剛健の気風が強調されていた時代に合った、

女の子は赤い線が二本、胸の周りに編みこまれていて、今でも通用する洒落たセーターでした。その頃は千里山のこかしこで同じセーターを着た子供達をよく見かけたことも懐かしい思い出となっています。

〔編集部〕 小木曾さんの紹介

千二小・吹田一中・春日丘高校を卒業された後、三井銀行に入行され、ご結婚後はご夫君の転勤でニューヨーク・ロンドン・チューリッヒに通算約12年ご滞在され帰国されました。

千里山開発物語の執筆者・和田昌允様は伯父にあたり、ご遺稿の情報提供から長年連載が可能となりました。

ご本人は合唱隊発足時からのメンバーとして皆さまによく知られています。